

怒り通り越して

ちょっとかわいそうな黎斗

——貴利矢は三作に渡って、柳ゆり菜さん演じる八乙女紗衣子と絡むシーンがあったりと、見どころがたくさんありますね。

小野塚 三作それぞれに主役がいるのであまり出しゃばらないようにはしていたんですが、遊べる場所は遊ぼうかなと。だから『ブレイブ&スナイプ』で、紗衣子さんが飛彩を食事に誘って振られたところで、咳払いで貴利矢が気にしているニュアンスを出したりしました。

——いつもと違う変身ポーズも見どころですよ。

小野塚 そうなんです。座った状態からキックセレクトして変身するアイデアがあったんですけど、本編では使えるシーンがなくて。鈴木(展弘)監督にお願いして、黎斗がガシャットを地面に投げるようにしてもらいました。貴利矢がそれをしゃがんで拾って、そこから変身ポーズができるようにしたんです。

——黎斗がガシャットを地面に投げるのも、小野塚さんの提案だったんですね。

小野塚 黎斗が偉そうに見えるし……というのは建前で、本音は僕がこの変身ポーズをどうしてもやりたかったんです(笑)。実は『仮面戦隊ゴライダー』の時に思いついたポーズだったのですが、披露する場がないまま本編が終わってしまったので、もう最後のチャンスだなと。鈴木さんは、すごく僕たちの意志を尊重

してくれる方なんです。ずっと同じキャラを演じているんだから、そのキャラのことはキャストが一番よくわかっているでしょうと、任せてくださって。特にVシネマは『エグゼイド』最後の映像作品だったので「思い残すことなくやって」とおっしゃってくださいました。そうしたらムダにCG使いたいと言い出した人もいるし……。

——ちなみに、どなたですか？

小野塚 黎斗……てっちゃんなんですけどね(笑)。「飛んでもいいですか？」と。変身前から黎斗が宙に浮くんですよ。貴利矢がクライマックスで仮面ライダーレーザーXに変身するシーンはバグヴァイザーを使うので、貴利矢らしい変身ポーズに加えて、貴利矢に意思を託した正宗さんの変身ポーズの雰囲気も出したくて。監督に「申し訳ないんですけど、自力じゃ出来ないんでガシャットをCGで飛ばしてもらっていいですか？」とお願いしました。そうしたらそれに便乗したかのように、黎斗はグリーンバックでスーッと浮く演出になったんです。内心「俺より大がかりじゃねえか！」とツッコみつつ(笑)、おもしろいなと思っていました。

——(笑)。Vシネマ三作までを通して、貴利矢は黎斗をどう思っているんでしょうね？

小野塚 何だかんだ言って、かわいそうだと思っているんじゃないでしょうか。もう怒りを乗り越えている。まあ、黎斗からしたらかわいそうだと思われる意味もわからないという感じですけど、「時代が追いついてこられないゲームを作ってしまった」「生まれてくる時代を間違えた」とか黎斗のセリフがありましたけど、ずっと彼は

独りなんだなと……。生死の境をさまよう危険なゲームに大勢を巻き込んでおいて何も感じないというのは、もう黎斗が悪いんじゃないで、根っからそういうヤツだから、誰が何を言っても響かないんでしょうね。最初はそれがわからないから、黎斗に対して憎い気持ちがあったり、「ふざけんな、この野郎」という気持ちが貴利矢にはあったんでしょうけれど、Vシネマの時は怒りを乗り越してちょっと情けもありつつ、哀れんでいる。どこで貴利矢がそうなったのかはわからないけれど。ただもう黎斗を絶対に倒してやるという覚悟を、台本を読んでいて感じ取りました。——そして、正宗の意志を継いだのは貴利矢でした。

小野塚 そうですね。本編でラスボスだった正宗に同情して……。簡単に言ってしまうと『エグゼイド』って檀一家に振り回されている話ですよ。ゲームエリアとか月とか、すごくスケールが大きいものに見えるけど、よく考えると狭い世界の中でずっと回っている。強大になっていく敵がどんどん出てきて戦うんじゃなくて、ずっと小さな枠の中のちょっとした親子ゲンカ。その親子ゲンカを止めるみたいな(笑)。

——貴利矢と黎斗が絡んだシーンで好きなのは？

小野塚 やっぱ『ゲム VS レーザー』の最後の取っ組み合いが、一番好きですね。「このクズが！」「うるせえクズ！」と子どものように罵り合って。雨でグチャグチャになって殴り合うことで、やっとな腹を割ってお互いをすべてさらけ出している状態、ずっと我慢してきたものをお互い

ぶつけ合っているからこそ、演じていても完成品を観ても胸が熱くなりました。

P.75

WITNESS07 貴水博之

復元された正宗

渾身の叫び

——本編のラストで消滅した正宗ですが、Vシネマでは再登場を果たしました。

貴水 これは嬉しかったですね。でも、最初に「今度はボロボロになっていただきますので」と言われたんです。そうか、本編ではすごく強い役をやらせてもらったし、このままでは終わらないよな……と思いました(笑)。

——それにしても、なかなかの「ボロボロ」具合でしたね。

貴水 台本を読んで「なるほど」と。僕自身、本編からVシネマへと変わった時に、観ている人をいい意味で裏切るような展開になったほうがおもしろいだろうと思っていましたから、ここはちょっと挑戦してみたいなと感じました。

——黎斗は改心したわけではなかった、というのがそもそものVシネマの発端ですが、その点については？

貴水 結局、彼は我が道を往く、ゴーイングマイウェイなタイプでしょう。何かしでかすような予感はしていましたね(笑)。

——正宗は縛られているシーンが大半でしたが……。

貴水 大変でした。一回縛られちゃうと、ずっとあのままでいなくちゃいけない。解くと、また同じように縛るのが難しいんです。長い時は4時間ぐらい、ずっとあの状態のままでした。電飾がすぐ接触不良を起こしちゃうので、あれを綺麗に光っている状態にするために、何度もやり直して。芝居のほうでは、黎斗が罵声を浴びせてくるけど、こちらは一切動けない。ああいう芝居は初めてでしたね。おもしろいシチュエーションですが、演じるほうとしては……。

——動けないから、表情と声だけで表現するしかない。

貴水 そうなんです。あと、最後の「チギレエエイ！」っていうのは、プロデューサーのご意向で、どうしてもやってほしいと。僕としても、どうせやるなら本編以上のことをやらないと、観てくださっている側もおもしろくないと思って、全力で臨みました。ただ、あのシーンを撮り終えた後は、声がかれました。仕掛けも難しかったんです。いいタイミングで、しかも派手にちぎれないといけませんから。

——『パラドクス with ポッピー』では、櫻子さんの写真を撮る回想シーンがとても印象的でした。

貴水 あのシーンは、すごく髪型を気にしたんです、若く見えるかどうか。演じていて思ったのは、正宗にもあんな幸せな時代が、確実にあったんだなということ。本当はもっと早くにそのことを思い出さなくちゃいけなかったんです、正宗は(笑)。

——Vシネマでは、本編の時以上に、正宗と黎斗の親子関係にスポットが当てられた印象です。

貴水 改めて、息子はこの父親のことを相

当、恨んでいたんだなと思いましたね。本編の時、正宗はまったく周りのことを顧みず、自分の野望を実現させることだけを考えていた。でも、今度は自分の息子がそうなったわけでしょう。そこで初めて、逆に黎斗に対して、親としての感情が芽生えたのではないかなと思うんです。縛られて、動けない中で人生を振り返った時に、自問自答を繰り返して、後悔とか反省の念も持った……。そんな気がしますね。

——本編では、正宗は黎斗をほかのキャラクターと同じく、変身後の名前で「デンジャラスゾンビ」と呼んでいましたが、V シネマでは「黎斗」でした。これはなぜだと思われましたか？

貴水 「デンジャラスゾンビ」と呼んでいた時期は、正宗がまさに絶頂にいたと思うんです。周りは全部、駒！ 自分の息子も、駒！ という。それが、消滅した後で復活した時には、やっぱり気持ちの上で、次のステージに移っていたんじゃないでしょうか。さっきも言ったような後悔や反省が影響していると思います。

——最後は、涙を流しながら消滅していきますね。あれは自然と流れた涙だったんでしょうか。

貴水 あれは『ゲム VS レーザー』の撮影の中でも、割と初期に撮ったシーンだったんです。もしかしたら、後半に撮っていたら、また違った芝居になっていたかもしれませんね。

——先に消滅するシーンを撮ったと。

貴水 そうです。そこから逆算して、それ以前のシーンでの芝居を考えた部分がありました。それもまた人生だな、と思いましたね。

——と、言いますと？

貴水 自分のとった行動が結果として返ってくる。因果応報というんでしょうか。正宗自体がそうですよね。散々ひどいことをしてきたから、最後は息子に月をぶつけられてしまう。

——宇宙なんてスケールが大きすぎますけどね(笑)。

貴水 息子はもうあの時点で、父親のすべてを超えてしまった。だから、正宗としては後のことを貴利矢に託すしかなかったんです。

——結果的に、それが人類を救うことに繋がりました。

貴水 そこまで正宗が考えていたかどうかは別として、少なくとも自分のとってきた行動や、人生に対して何らかの「答え」を出そうとは思っていたんでしょうね。黎斗に伝えることはできなかったですけどね。そこは無念だろうけど、仕方がない。世の中をあれだけ混乱させた正宗ですから、最後の行動だけですべてが報われるとか、そんな生易しいことではないでしょう。